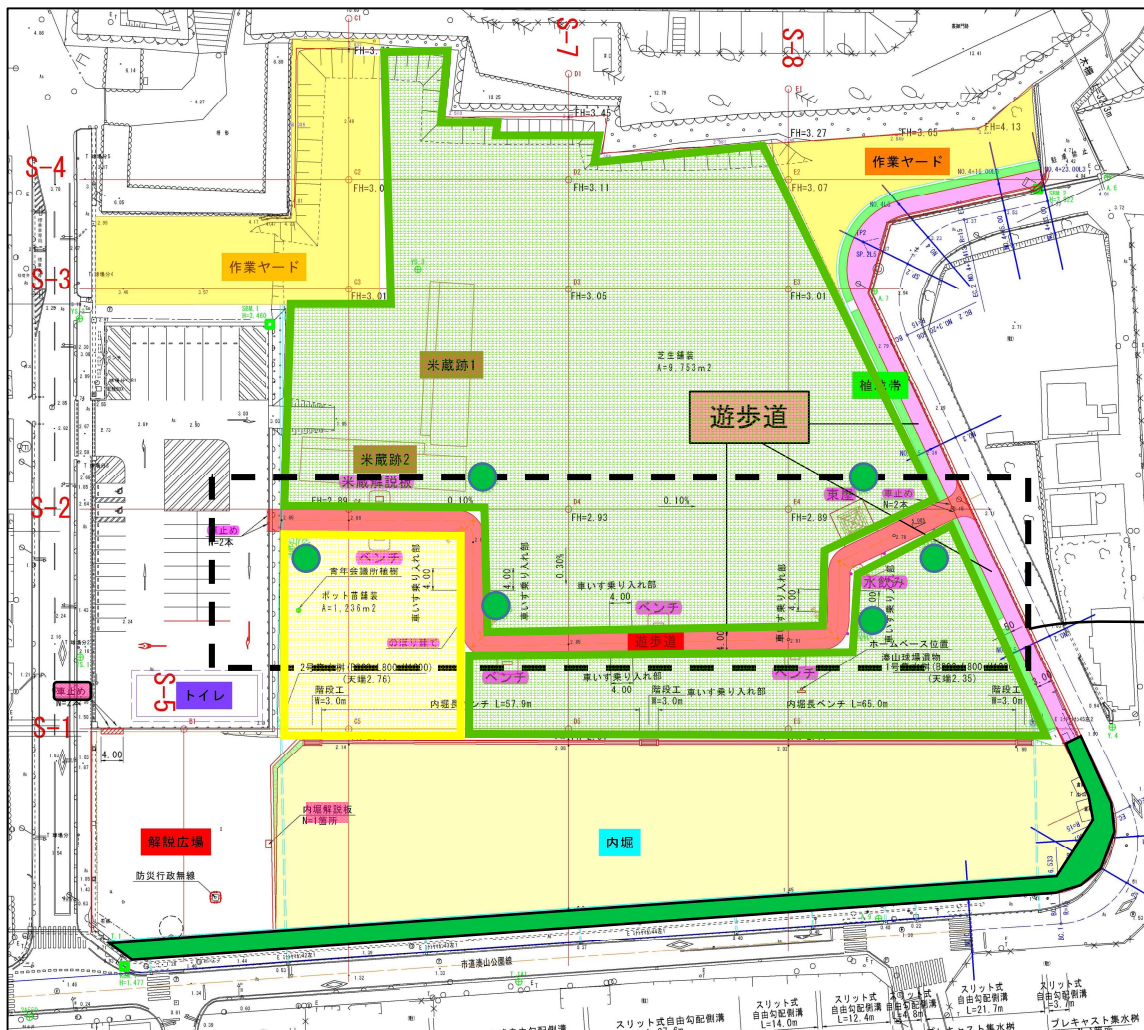
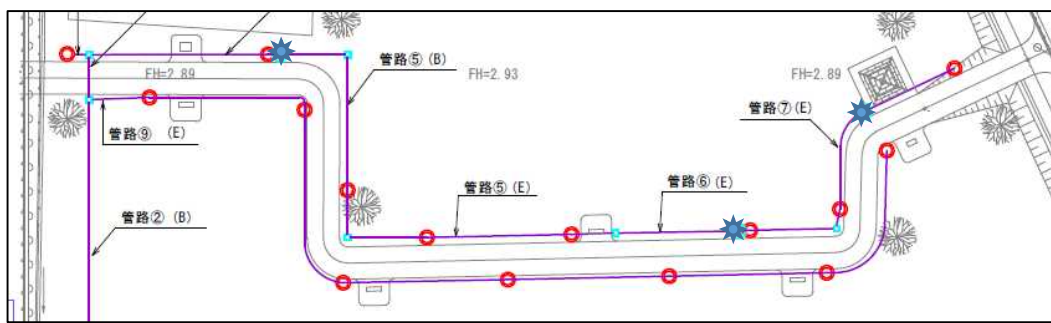


議事 (1)
令和7年度 米子城跡三の丸整備



拡大



内容	備考	内容	備考
遊歩道	カラー舗装	構造物設置	水飲み(1箇所)
内堀 (既存歩道と水路の間)	カラー舗装		ベンチ(4基)
中木植栽	クログネモチ エドヒガンザクラ		のぼり建て(16箇所)
電気設備	コンセントポール(3基)	芝張	車止め(6本)
	フットライト(15基)		解説板(米蔵・内堀)
			東屋(1箇所)
			ロール芝
			ポッド苗

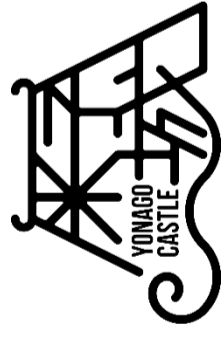
年次計画表

	R6												R7												R8												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
準備工																																					
敷地造成工																																					
排水設備工																																					
散水施設工																																					
上水道設備工																																					
電気設備工																																					
修景施設整備工																																					
植栽工																																					
園路広場整備工																																					
サービス施設 建築施設整備 工																																					
管理施設整備工																																					

備考

- ・ 供覧開始を令和8年秋頃を目標とした工程
- ・ 工事進捗、補助事業の優先順位などの変更から実施工種の入れ替え、工期延長の可能性あり

R6現年
 R6補正
 R7



こめぐら 三の丸米蔵(英訳)

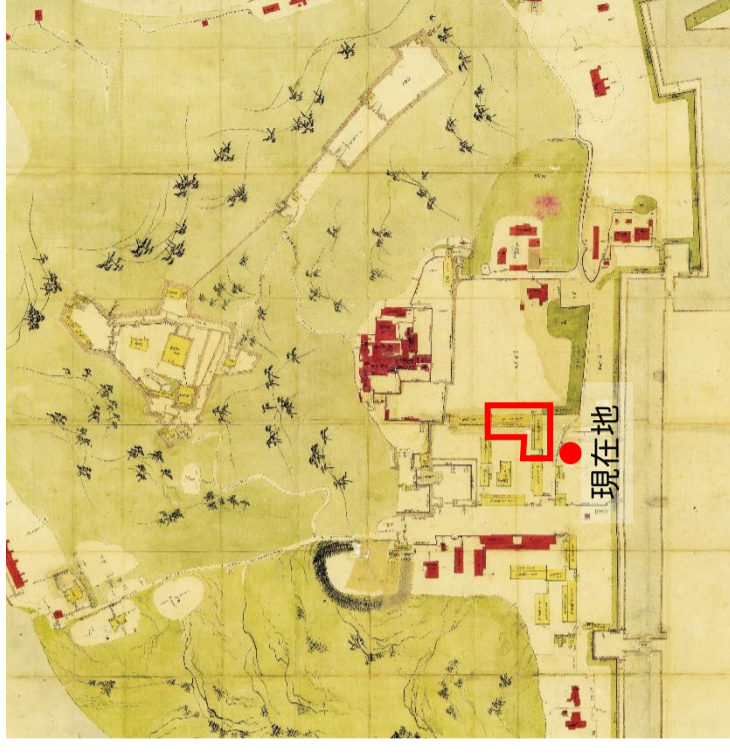
QR

「よなごおんしろへいめんず米子御城平面図」(江戸末期)によると、二の丸枡形北側には中央のこめぐら米蔵が建てられています。建物は3×15間(約6×30m)ほどの大きさで、幅1間(約2m)程の雨よけのながひだし長庇がついていました。これらの米蔵は、現存する鳥取藩橋津の藩倉(鳥取県東伯郡湯梨浜町)のように、瓦葺・土蔵造であったとこめぐら思われます。

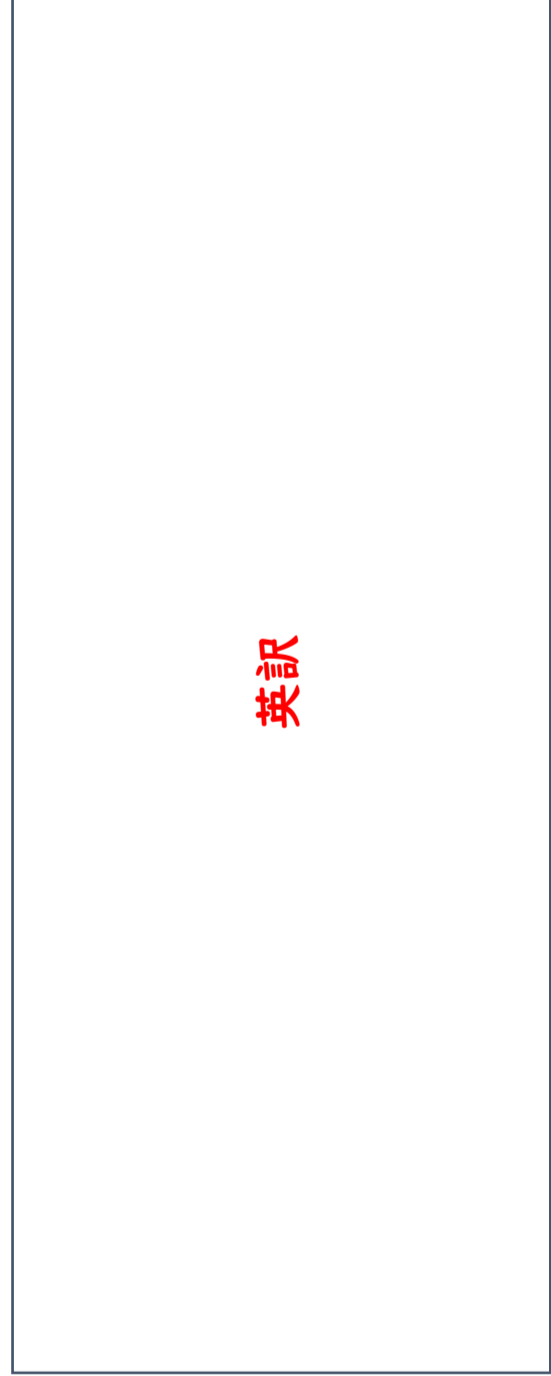
江戸時代には米子城内に15棟の米蔵が存在しており、年間を通して合計5万4千俵(1俵は約60kg)ほどの米が納められていました。

発掘調査で確認された米蔵の位置・規模を表現しています。この上に立ち、当時の米蔵の大きさを実感してみてください。

※斗場：年貢米を計量したり、品質をチェックする所。蔵に確実に納めるまでを監視するため、米蔵が一望できる場所に建てられています。



米子御城平面図
(米子市立山陰歴史館蔵 江戸末期)



英訳



橋津の藩倉
(鳥取県保護文化財・湯梨浜町教育委員会提供)



うちぼり 内堀 (英訳)



米子城には中海の水を引き込んだ、内堀と外堀の二つの水堀がありました。

内堀は湊山北麓の三の丸から飯山、深浦郭を囲む堀で、城内と城下町を区画する役割を果たしていました。内堀には、表御門と裏御門の2か所に橋がかけていました。

この内堀は表御門付近で幅16間半(約33m)あり、深さは約4.5mあり、中海と接するところには船溜まりが設けられていました。表御門と裏御門の脇には乗船できる雁木(石段)が設けられており、船を横付けして乗り込むことができました。

藩主や首席家老荒尾氏は、米子城で船を利用することが多く、内堀は城の防御機能とともに重要な交通手段として活用されていました。このように、内堀は米子城が海城であることを象徴する特徴の一つでした。



英訳



伯耆国米子平図
(宝永6(1709)年・鳥取県立博物館蔵)



米蔵解説板説明文

原案についての意見

- 説明は簡潔に、同じ情報は繰り返さない。
- ルビは必要？ もし、必要であれば初見のみ（米蔵^{こめぐら}、斗場^{はかりば}は1回のみ）。
- 斗場が米蔵を監視できる位置関係がわかる絵図を使用（弘化4年9月）
- もし、「米子御城平面図」（江戸末期）を使用するならその記述は、絵図下にあるので、本文では省略し、拡大した絵図を使用し現在地を明記。
- 「橋津の藩倉」の写真を見て理解できる情報は省略し、建物を簡潔に説明。（写真を「鳥取藩橋津の藩倉」という記述に変更）

米蔵解説板説明文再案（検討案）

^{こめぐら}
三の丸米蔵（英訳）

江戸時代には、米子城内に15棟の米蔵が存在しており、年間を通して合計5万4千俵（1俵は約60kg）ほどの米が納められていました。その内、「米子御城平面図」^{よなごおしろへいめんず}には二の丸枡形北側には中央の斗場^{はかりば}※を囲むように7棟の米蔵が描かれています。発掘調査により、建物は3×15間（約6×30m）ほどの大きさで、幅1間（約2m）程の雨よけの長庇^{ながひさし}がついており、現存する橋津の藩倉のような瓦葺・土蔵造であったことも分かってきました。

この上に立って、確認された米蔵の位置・大きさを実感してみてください。

※斗場：年貢米を計量したり、品質をチェックし、蔵に確実に納めるまでを監視する所。



参考：米子御城正面之絵図面
弘化4年9月

内堀解説板説明文

原案についての意見

○説明は簡潔に、興味関心を引く情報には余分な説明は除く。

○ルビは必要？ もし、必要であれば初見のみ（内堀、外堀、^{うちぼり}表御門は1回のみ）。

○陸地（湊山等の）と中海の色がより区別できる絵図を使用（享保5年10月）

宝永6年絵図は、城が海に浮かんで見える。

○拡大した絵図に2つの橋や現在地を明記。

内堀解説板説明文再案（検討案）

^{うちぼり}内堀（英訳）

米子城には中海の水を引き込んだ、内堀と外堀^{そとぼり}の二つの水堀がありました。

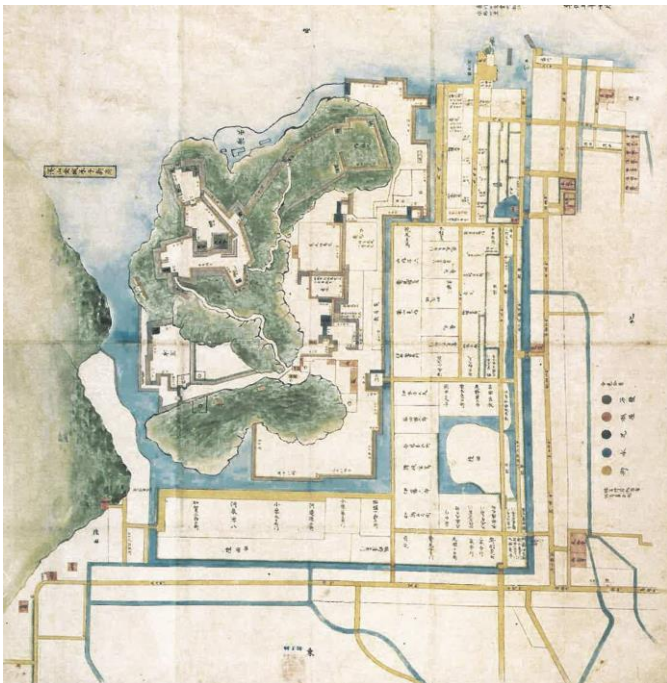
内堀は湊山北麓の三の丸から飯山、深浦郭を囲む堀で、城内と城下町を区画する役割を果たしていました。

内堀には、^{うちぼり}表御門と^{うらごもん}裏御門の2ヶ所に橋がかけられていました。

この内堀は^{うちぼり}表御門付近で幅16間半（約33m）、深さは約4.5mもあり、中海と接するところには船溜まりが設けられていました。

令和元年（2019年）の発掘調査では、三の丸側の内堀石段が確認されました。詳細な絵図によると^{うらごもん}裏御門の脇には二段の雁木^{がんぎ}（石段）が確認でき、船を横付けして乗降していたことも分かってきました。

内堀には城の防御機能だけでなく船が利用できる海城としての機能も兼ね備えていたことがよく分かります。



享保5年10月絵図



宝永6年絵図